

4 まとめ 推定される大手門の位置

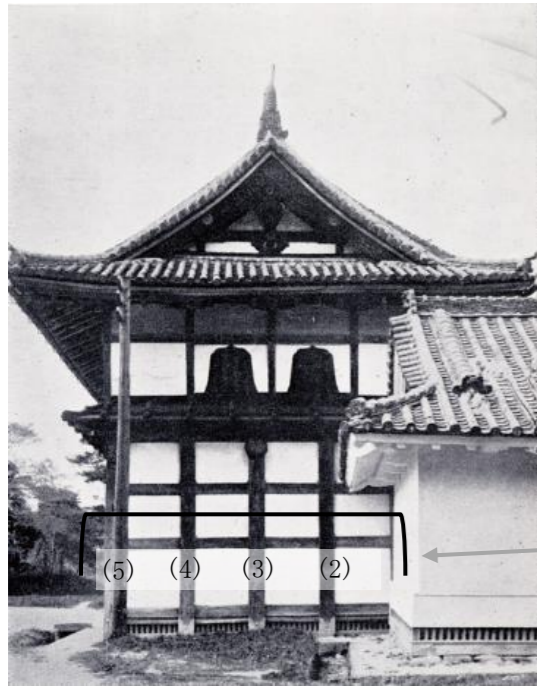


図12 大手門南面全景

『仙台城』(仙台市教育委員会 1967に番号を加筆)



図11 大手門跡の位置推定図(小倉強「仙台城の建築」掲載図面のトレースを合成)

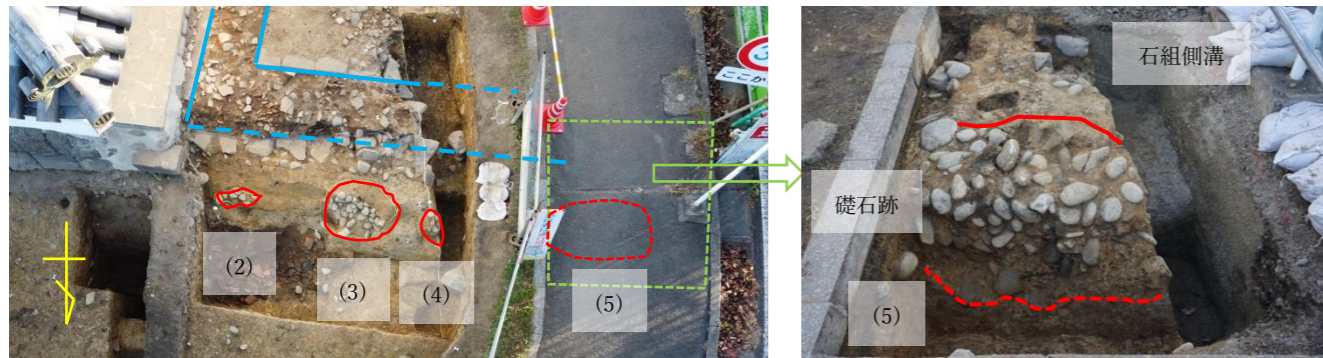


図13 令和5年度・令和6年度検出の礎石跡と石組側溝(北から)(番号は図12と対応)

<今年度の成果>

- ・大手門の古写真を見ると、南辺の礎石は5つとなっており、東から2番目の柱が石組側溝の南北辺の延長線上にあることが確認できます(図12)。そのことから、調査で確認した4つの礎石跡は、東から2~5番目の礎石跡であると考えられます。
- ・南西隅の柱の位置が確認されたことで、大手門南辺の位置とあわせて、大手門の範囲をさらに絞り込むことができるようになりました。
- ・石組側溝が脇櫓の西から南にかけて広い範囲で確認されたことで、脇櫓の屋根の範囲を推定する材料が得られました。令和5年度の調査成果もあわせて考えると、再建された現在の脇櫓は、江戸時代の頃と比べて西辺は位置がずれており、南側はおおむね同じ位置で建てられたことが確認されました(図11)。

くにしせきせんたいじょうあと おおてもんあと 国史跡仙台城跡 大手門跡および周辺発掘調査(第2次) 遺跡見学会資料

仙台市教育委員会文化財課
令和6年11月30日(土)

1 調査概要

遺跡名	国史跡仙台城跡	所在地	仙台市青葉区川内地内
調査原因	国庫補助による遺構確認調査	調査面積	約70㎡
調査主体	仙台市教育委員会(担当:文化財課)	調査期間	令和6年6月~11月



図1 仙台城跡マップと調査位置

令和5年度から大手門跡および周辺での発掘調査が始まり、今年は2年目にあたります。調査では将来的な復元に向け、柱などの痕跡を探すことで門の位置を確認するほか、大手門周辺の様子も含めて把握することを目指します。

令和5年度には古写真や図面等をもとに、大手門が建っていたと考えられる地点で調査を実施しました。その結果、大手門南辺の柱の痕跡(礎石跡)3箇所と、大手門の周囲を巡っていた石組側溝が確認されました。令和6年度は脇櫓の南側や、令和5年度に確認された礎石跡の延長線上で発掘調査を実施しました。

大手門跡および周辺発掘調査については、これまでの調査成果も踏まえて、次年度以降も継続して実施していきます。

2 大手門について

大手門の創建年代については、本丸造営時に建造したとする慶長期造営説、二の丸を造営した頃に、その大手門として建造されたとする寛永期造営説など諸説ありますが、江戸時代を通じて正門として存続していました。

昭和6(1931)年には、大手門と大手門脇櫓が国宝に指定されましたが、昭和20(1945)年7月の仙台空襲により焼失しました。焼失した後は、道路整備など周囲で造成が行われて現在の状況にいたります。

建物構造は木造2階建入母屋造り、瓦葺であり、規模は1階が桁行約65尺(約19.7m)、梁間約22.3尺(約6.8m)、高さ約12.5mあり、全国的に見ても大規模な門です。



図2 焼失前の大手門の様子:

大手門東面(正面)

『仙台城』(仙台市教育委員会 1967)

3 調査成果

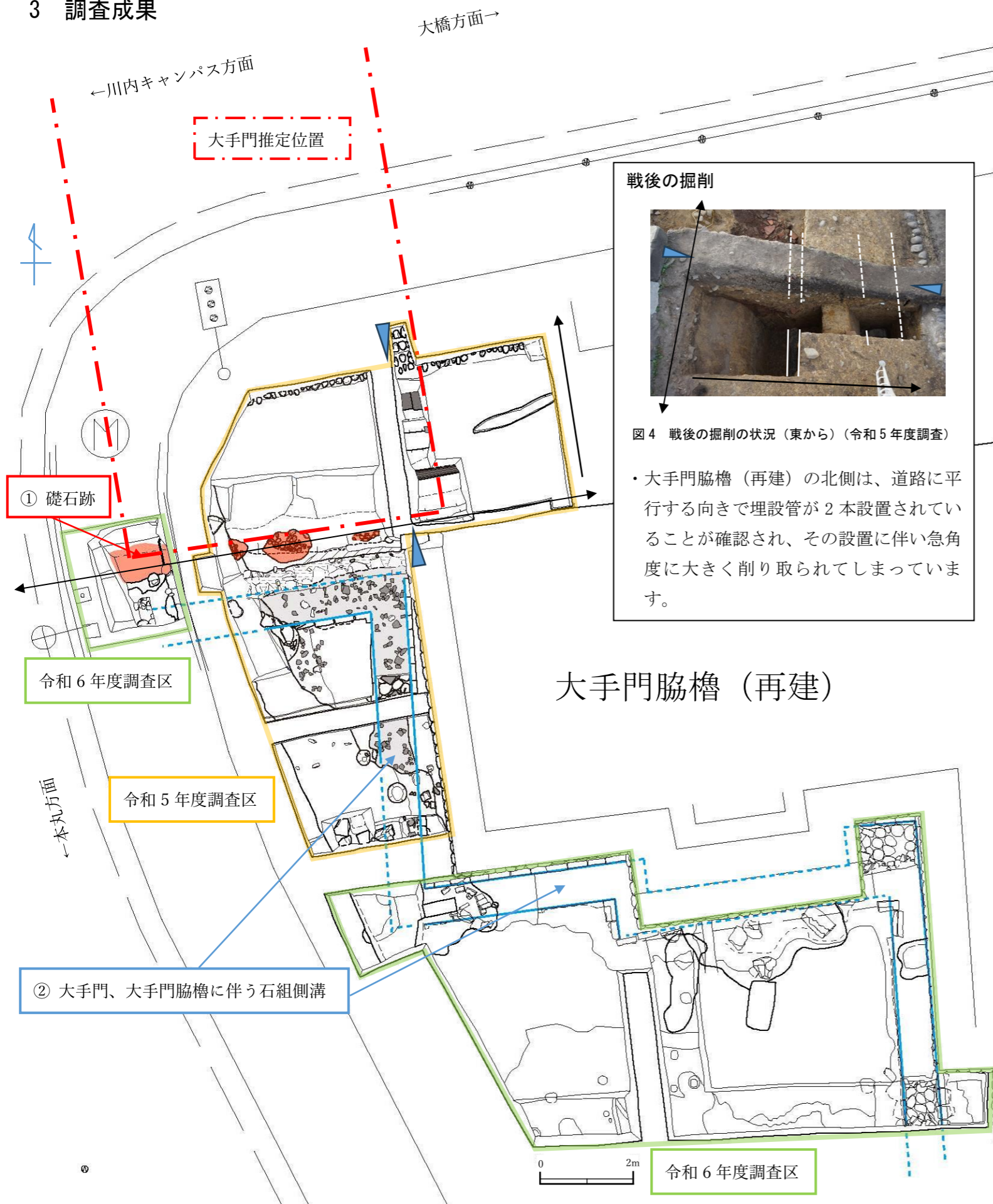


図3 令和5年度、6年度 調査区模式図

戦後の掘削

図4 戦後の掘削の状況（東から）（令和5年度調査）

- ・大手門脇櫓（再建）の北側は、道路に平行する向きで埋設管が2本設置されていることが確認され、その設置に伴い急角度に大きく削り取られてしまっています。

① 礎石跡 大手門の柱の痕跡

- ・脇櫓（再建）の西側で柱の痕跡が1箇所確認されました。令和5年度に3箇所確認された礎石跡の延長線上にあり、これまで確認された礎石跡の中で最も残りが良いものです。大手門の焼失前の写真や石組側溝との位置関係から、南西隅の柱の痕跡であると考えられます。
- ・柱がのる礎石は確認されず、円礫で構成される根固め石のみが確認されました。根固め石は柱がのる礎石が沈下しないように礎石の周囲に詰められる石です。
- ・埋設管などの設置によって、門の焼失後に礎石跡のうち大半が削られてしまっていることが今年度の調査でもわかりました。

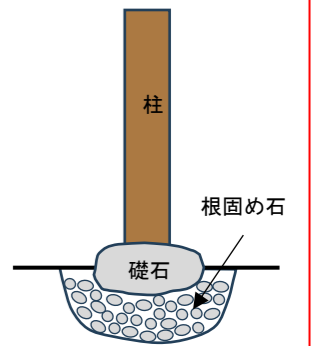


図7 礎石跡の模式図



図5 礎石跡の検出状況（北から）

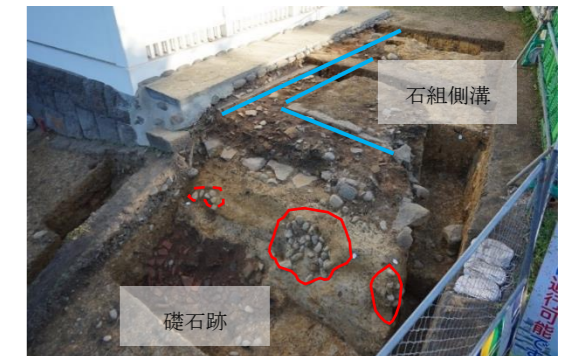


図6 令和5年度の礎石跡検出状況（北東から）

② 石組側溝 大手門と大手門脇櫓の周囲を巡っていた側溝

- ・脇櫓の周辺では、石材を組んで作られている側溝が確認されました。屋根から落ちる雨水を受けるための溝（雨落ち溝）であると考えられます。古写真や過去の図面からは、大手門と大手門脇櫓の周囲を巡っている様子が確認されています。
- ・雨水を受けるための溝なので、屋根の先端の真下に沿って設置されます。昨年度も脇櫓（再建）の西側で確認されており、今年度はその延長部分が検出され、脇櫓の屋根の形に合わせてクランク状に巡っている様子が確認されました。
- ・石組側溝の構築時期については、昨年度検出された範囲で、石材に電動工具によるものと見られる痕跡が確認されたため、明治期の陸軍による修復時であるものと考えられます。
- ・側溝の堆積土からは、大手門と大手門脇櫓が焼失した際のものと考えられる焼土や赤色化した瓦が多く確認されました。



図8 石組側溝の検出状況（南西から）



図9 石組側溝の構造（南東から）



図10 雨落ち溝の模式図

- ・石組側溝の輪郭（青線）のように、屋根の形に沿ってクランクしていることがわかります。
- ・石材が2段組まれており、底面には円礫が詰められています。